

新聞英語の二極性に関する一考察

— イギリスの高級紙と大衆紙 —

A Study of the Polarity of Newspaper English

— Quality and Popular British Newspapers —

野 波 侑 里

NONAMI Yuri

0. 序

イギリスの新聞は一般に高級紙と大衆紙に大別される。その第一の特徴は、紙面の大きさであり、高級紙は、日本の『朝日』、『毎日』、『産経』新聞など一般の新聞と同じ大きさであるのに対し、大衆紙はその半ページの大きさのいわゆるタブロイド版である。第二の特徴は、発行部数である。現在発行されているイギリス高級紙には、*The Times*, *The Independent*, *The Guardian*, *The Telegraph*, *The Financial Times*などがあり、大衆紙には、*The Daily Express*, *The Daily Mail*, *The Mirror*, *The Sun*, *The Star*などがある。*The Times*は、名実共にイギリスを代表する新聞であると言える。しかし、イギリスにおける発行部数では、Audit Bureau of Circulationsの調査による1998年1月から9月のイギリスで発行された新聞の発行部数の平均を、高級紙と大衆紙に分けてみると、高級紙が全体の21%であり、大衆紙が79%を占めている。特に、大衆紙*The Mirror*, *The Sun*だけで全体の46%を占めており、一方*The Times*は全体の6%という結果であった。タブロイド版の大衆紙が人気を博しており、高級紙は、読者が特に少数のエリートに絞られているようである。

第三の特徴として高級紙と大衆紙では、英語の語彙と文において相違があり、幅広い読者層を持つ大衆紙がより平易な文章を使用していることが予測される。

このように現在人気を博している大衆紙と、発行部数の比較的少ない高級紙の英語には、それぞれどのような特徴があるのだろうか。本稿では、高級紙と大衆紙に掲載された2つの同一主題についての記事を比較することにより、どの程度の違いがあるかを考察するのが目的である。同一主題の各紙の記事について、ヘッドライン、書出しそして本文において用いられる語彙、構文や文体の比較し、また、各紙で使用されている名詞、形容詞、動詞をゲルマン系とロマンス系の語彙に分類して、どの程度の違いがあるかを考察した結果を報告する。

さらに、Roger Fowler(1991:222)は、“News is not a natural phenomenon emerging straight from ‘reality’, but a *product*.”としている。筆者も、このFowlerの観点を念頭に置き、新聞によって、「事実」が社会層に反映されて、どのように社会の「生産物」となっているかについても考察していくことにする。

I. 記事 1

まず、1998年8月7日に起きたテロリストによるケニアとタンザニアのアメリカ大使館襲撃事件に関する翌日の各紙の記事について比較する。記事1については、高級紙は*The Times*、*The Independent*、*The Guardian*、*The Daily Telegraph*を、大衆紙は*The Mirror*、*The Sun*の記事を使用した。

I-1 ヘッドライン

新聞のヘッドラインは、読者が最初に情報を得る最も重要な部分である。読者の購読意欲は、このヘッドラインによって決まると言っても過言ではない。Harold Evans(1972:29)は、“A headline is not a choice number of words arbitrarily bolted together. It has its own integrity. It is a crisper version of the way we communicate by speech and prose.”とヘッドラインの機能について述べている。

では実際に、各紙のヘッドラインを比較してみることにする。

- (1) US embassy bombers kill 80 (*The Times*)
- (2) US reels as 80 die, 1,120 hurt in huge embassy bombings (*The Independent*)
- (3) US vows to bring bombers to justice after scores die in East Africa attacks (*The Guardian*)
- (4) 80 killed in US embassy bombings (*The Daily Telegraph*)
- (5) VICTIM'S AGONY AS TERRORISTS KILL 100 (*The Mirror*)
- (6) BARBARIC (*The Sun*)

6紙のヘッドラインを並べてみると、各紙の個性は明白である。まず、視覚的な点で、大衆紙の*The Mirror*と*The Sun*のブロック体の活字が目につく。Quirk et al.(1985:845)は、ブロック体について“Newspaper headlines commonly contain block language because of pressure on space.”と述べており、読者の注意を引きつける効果は大きく、これは大衆紙で多用されている。また大衆紙は、ヘッドラインの活字の大きさにおいても、高級紙に比べて紙面を割く割合は非常に大きいこともつけ加えておく。

ヘッドラインの一般的な特徴である、(1)(2)(3)(4)に見られる“the United States

of America”を“US”と縮約するなどの縮約形の多用、冠詞の省略、過去の出来事について現在形を使用する、toの省略、接続詞の省略などの特徴は、共通して全ての新聞に見られた。

次に、主語について注目すると、高級紙の(1)は“bombers”を主語にし、爆弾投下者が引き起こした被害の大きさに関する事実そのものを伝えている。(2)は、“US”を主語にし、アメリカが今回の爆弾事件に動揺している旨を伝え、(3)は(2)と同様“US”を主語にしているが、内容は、事件直後の報道にもかかわらず、事実を冷静に受け止めて、今後のアメリカの毅然とした態度の表明を前面に打ち出している。(4)は、殺された80人という犠牲者を主題にして、この爆弾事件によって、読者と同じ立場の民間人が殺されたという視点でヘッドラインが書かれている。つまり、高級紙は、各紙により視点は違うが、共通して事実を冷静に伝えている。

一方、大衆紙(5)(6)では、共に主語を曖昧にし、(5)は“AGONY”という感情的な表現をヘッドラインのトップで使用し、また、この時点ではまだ犯人が断定されていないにもかかわらず、“terrorist”という語を使って、テロリストに対する憎しみを前面に打ち出している。(6)は、6紙の中で最も短く、“BARBARIC”という1つの形容詞が事件を物語っている。事件を知らない読者にとっては、本文に進まなければ意味がわからない手法であるが、それだけ読者は興味がそそられるわけである。

O’Donnell, W.R. and Loreto, Todd (1991:89)は、高級紙と大衆紙のヘッドラインについて、“Headlines too usually contrast. Those in the quality papers offer a resume of the story,..., whereas those on the front page of the tabloids are often intended to intrigue or mystify...”とし、高級紙は事件の要約、大衆紙は読者の好奇心をそそる、あるいは謎をかけたりにするという着眼点でヘッドラインが作られているとしている。今回引用した記事においても、それは当てはまる。また、同じ高級紙であっても、事件の要約の焦点は、各紙によってそれぞれ趣向があり、特徴がはっきりと現れている。上述した、Harold Evans(1972:29)の、“It has its own integrity. It is a crisper version...”も納得できる。

I - 2. 書出し

小説やエッセイでは、一般に場面設定から始まり、徐々にストーリーの核心部分に触れていくが、新聞では、本文の書出し部分で事件の全貌を述べ、その後詳細について語るという、いわゆる逆ピラミッド形式になっている。そのため、各紙の記事を比較する上ではヘッドラインと同様に書出し部分は各紙の特徴が見られる重要な部分とも言えよう。以下は記事の書出しの第一文である。

- (7) TERRORIST attacks against American embassies in Africa yesterday left up to 80 dead and as many as 1,200 injured in twin blasts in Nairobi and Dar es Salaam. (*The Times*)
- (8) Bombs ripped through the American embassies in Nairobi and Dar es Salaam yesterday, killing as many as a hundred and wounding more than 1,000. (*The Independent*)
- (9) President Clinton yesterday launched an international hunt for the perpetrators of two murderously effective car-bomb attacks on United States embassies in Kenya and Tanzania which left scores dead and more than 1,000 injured. (*The Guardian*)
- (10) AMERICA tightened security at its outposts around the globe last night after car bombs killed at least 80 people and wounded more than 1,700 at two US embassies in East Africa. (*The Daily Telegraph*)
- (11) SCREAMING in pain, a blood-soaked casualty flees the carnage after terrorist bombers struck at American embassies in East Africa yesterday. (*The Mirror*)
- (12) AMERICA was braced for more terrorist outrages last night after religious fanatics were blamed for two barbaric embassy bombings that killed 100 and left 1,100 injured. (*The Sun*)

6つの新聞の書出しを概観してみると、(7)は、“TERRORIST attacks against American embassies in Africa yesterday”という長い主部を用いて、事件の全貌を1文に簡潔にまとめており、6紙の中で最も客観的な内容と言える。(8)は、主語に“bombs”という「物」を使用することにより、特定されていない犯人について曖昧な立場を取っている。(9)は、主語には“President Clinton”を使用し、ヘッドラインから続いてアメリカの今後の姿勢に関するクリントン大統領の対応を前面に打ち出し、文構造から見ても、死者と負傷者については、which以下の従属節に置いている。また、“terrorist”ではなく、“perpetrators”と表現し、(8)と同様に、犯人への慎重な姿勢がうかがえる。つまり、高級紙においては、The Timesを除いて、不確定な情報については、極力押さえて曖昧な表現を使用していることがわかる。

一方、大衆紙(11)(12)はともに“terrorist”という言葉を使用している。また(11)は、“SCREAMING in pain”、“a blood-soaked casualty”という表現で、書出しにおいても事件の全貌ではなく、事件の生々しい光景を伝えている。(12)は、(10)と同様に、アメリカがテロリストによって身を引き締めたと述べているが、その表現では、“terrorist

outrages”、“barbaric embassy bombings”など、テロや爆弾という語に“outrage”、“barbaric”などのセンセーショナルな語をつけ、事件の悲惨さを強調している。記事の書出しにおいても、大衆紙の感情的な表現が目につき、高級紙とは対照的である。

I - 3. 本文

本文においても、各紙で様々な特徴が見られた。この事件に関するクリントン大統領の態度に関する表現を以下に比較してみる。（下線は筆者）

- (13) Last night a visibly shocked President Clinton condemned the “inhumane terrorism” and vowed to bring the bombers to justice. (*The Times*)
- (14) In Washington, a grim President Clinton vowed to bring the bombers to justice. ... ANGRY President Clinton vowed last night to hunt down the terrorists who bombed two US embassies, leaving up to 100 dead and 1,000 injured. (*The Mirror*)
- (15) An angry Clinton—shocked by the slaughter of his countrymen in Kenya—said: “These acts of terrorist violence are abhorrent. They are inhuman. (*The Sun*)

高級紙では、*The Times*が、(13)のように“a visibly shocked President Clinton”というやや控えめで受動的な表現を使っているに留まり、他の高級紙では、“Bill Clinton”(*The Independent*)、“President Clinton”(*The Guardian*)、“Mr Clinton”(*The Telegraph*)というように、クリントンを修飾する語は見られない。一方、大衆紙では(14)の“a grim President Clinton”、“Angry President Clinton”、(15)の“An angry Clinton”など、感情を示す表現を用いている。

また、負傷者の表現では、以下のような例が見られる。

- (16) Dozens of mutilated bodies were laid out on a patch of grass amid shards of glass and lumps of masonry. (*The Times*)
- (17) Hundreds of screaming victims were sprawled along the road, many with missing limbs. (*The Sun*)

高級紙(16)では、「手足を切断された」という語彙に“mutilated”を使用しているのに対し、大衆紙(17)では、“missing limbs”というより平易で具体的な表現を用いている。また、(16)では、負傷者を横たえた道路の状況について“on a patch of grass amid

shards of glass and lumps of masonry”と詳しく説明し、“masonry”という使用頻度の低い語を使用しているのに対し、(17)では道路の状況については、“along the road”と簡潔に表現するに留め、“screaming victims”と犠牲者の状況を具体的に報道している。

さらに、セキュリティを強化するという概念について、下記の二例を比較してみる。

(18) AMERICA tightened security at its outposts around the globe last night after car bombs killed at least 80 people and wounded more than 1,700 at two US embassies in East Africa. (*The Daily Telegraph*)

(19) Last night Bill Clinton ordered security to be beefed up at EVERY U.S. embassy—and particularly the base in London because of America’s close ties with Britain. Extra (*The Sun*)

(18)では、“tightened”という語を使用しているのに対し、(19)は、“be beefed up”として、よりくだけた口語的な表現を使用している。

その他の語彙においても、*The Sun*では、“blood-thirsty terror”や、テロリストについて“madmen”と言ったり、“That response came in balls of flame, streams of blood and wails of agony on the streets...”、“He also saw a colleague have her nose ripped off.”など特に人物に関する生々しい表現が数多く見られる。

以上で考察した語彙について、語源による区別をしてみると、大衆紙で使われた、クリントン大統領を修飾する“grim”と“angry”、そして負傷者の表現の“miss”と“limb”が共にゲルマン系の語彙であるのに対し、高級紙で使用された、“shock”そして“mutilate”はラテン系の語彙である。梅田修(1985:13)では、「一般にアングロ・サクソン語を中心とするゲルマン系の言葉は最も日常的であり、会話的であり、またひらがな語的な感じを与えるものが多い。それに対しラテン系の言葉は、漢字言葉に似ている。ラテン語系の言葉でも、古い時代に借入された言葉ほど日常語化して重要な基本語彙を形成しているが、ルネッサンスを契機に古典ラテンより大量に借入された言葉は、高度な概念を内包した知的語彙でフォーマルな感じを与えるものが多い。」とし、またDavid Crystal(1988:177)は、“The Old English word is often the more popular one, with the French word being literary, and the Latin word more learned.”としている。高級紙が大衆紙と違い、知的語彙で、フォーマルな感じを与えるラテン系の語彙を選択しているという点で、高級紙がよりフォーマルで高級な印象を与えているとも言える。

今回考察した6紙の記事中に登場する全ての名詞、動詞、形容詞を取り出して、ゲルマン系、ロマンス系に分けて調査を試みたところ、表1の語数が確認され、それを各品詞別

に割合を出した結果が表2である。調査にあたっては、OED第2版を使用し、記事中の同一単語は1と数えて統計を行った。

表1 記事1の中の名詞・形容詞・動詞の語源別総数一覧

新聞名	ゲルマン系				ロマンス系			
	名詞	形容詞	動詞	合計	名詞	形容詞	動詞	合計
<i>The Times</i>	33	6	38	77	66	18	38	122
<i>The Independent</i>	20	3	24	47	59	15	24	98
<i>The Guardian</i>	26	3	28	57	71	11	35	117
<i>The Daily Telegraph</i>	31	4	29	64	70	9	37	116
<i>The Mirror</i>	38	8	47	93	70	9	40	119
<i>The Sun</i>	35	5	33	73	60	8	25	93

単位：単語数

表2 記事1の中の名詞・形容詞・動詞における語源別比率

新聞名	名詞		形容詞		動詞		総計	
	ゲルマン	ロマンス	ゲルマン	ロマンス	ゲルマン	ロマンス	ゲルマン	ロマンス
<i>The Times</i>	33%	67%	25%	75%	50%	50%	39%	61%
<i>The Independent</i>	25%	75%	17%	83%	50%	50%	32%	68%
<i>The Guardian</i>	27%	73%	21%	79%	44%	56%	33%	67%
<i>The Daily Telegraph</i>	31%	69%	31%	69%	44%	56%	36%	64%
<i>The Mirror</i>	35%	65%	47%	53%	54%	46%	44%	56%
<i>The Sun</i>	37%	63%	38%	62%	57%	43%	44%	56%

統計結果を概観すると、ロマンス系の語が多いことは、英単語全体のゲルマン系とロマンス系の語数の違いによると思われるが、その中で敢えて比較を試みると、名詞、形容詞では*The Independent*にロマンス系の語彙が特に多いことが注目される。また、*The Guardian*も、名詞、形容詞にロマンス系の語を特に多用している。同じ高級紙である*The Times*は、名詞、形容詞共に、ゲルマン系の語が多少多くなっている。動詞においても、大衆紙の*The Mirror*と*The Sun*は名詞、形容詞、動詞の全てにおいてゲルマン系の語が多いことが確認された。これはインフォーマルな印象を受ける大衆紙であるため予想どおりであったが、*The Times*も同じようにゲルマン系の語が比較的多くなっているのは予想外であった。

つまり事件記事においては、高級紙の*The Independent*、*The Guardian*、*The Daily Telegraph*にロマンス系の語が比較的多く、大衆紙の*The Sun*、*The Mirror*と共に*The Times*においてもゲルマン系の語が多いことが注目される。これは*The Times*の変貌を物

語っているのではないか。

大衆紙においてゲルマン系の語彙が比較的多いことから、高級紙よりも大衆紙の方が、よりインフォーマルな文章だと言うこともできるのではないか。

さらに、語彙の点で注目すべき例をあげてみることにする。今回の事件の犯人を推測する文を、各紙から抜き出した。各紙とも、今回は犯行声明が事前に行われなかったため、推測の域を越えない文の表現である。

- (19) Western diplomats speculated that Middle Eastern terrorism had spilt into the soft underbelly of Africa. (*The Times*)
- (20) But none of this makes it certain that any group in particular targeted the US and most responsible experts counselled caution over any attribution of responsibility. (*The Independent*)
- (21) But there was speculation that the explosions were the work of Middle Eastern Islamic extremists. (*The Guardian*)
- (22) But suspicion focused on Osama bin Laden, a Saudi Arabian Islamist zealot who has declared a personal war on America. (*The Daily Telegraph*)
- (23) Libya and Iraq, along with fanatical Islamic groups, were high on the list of suspects. (*The Mirror*)
- (24) The madmen behind the attacks at the U.S. buildings in Kenya and Tanzania are thought to be Islamic fundamentalists hell-bent on a Holy War against the "Great Satan." (*The Sun*)

特に注目すべきは、(21)が、There存在文を使用し、また“speculation”という名詞を使用することにより、憶測の主体を表現することのない、慎重な姿勢が伺える。(22)は、“western diplomat”という職業を特定した主語を立て、その立場からの憶測として伝えている。つまり、高級紙では、断定的な表現をさける傾向にある。一方、大衆紙の(23)では、“be high on the list of suspect”という直接的な表現を使用し、(24)は、動詞“think”を用いて、高級紙よりも、主観的で、断定的な印象を受ける。

以上のように、記事1について考察を行ったが、ヘッドライン、書出しそして本文においても、高級紙と大衆紙では、文体が著しく異なる事実は明白である。

II. 記事2

次に、1998年7月27日のイギリスの政治に関する記事について考察を試みた。内容はブレア首相が首相選挙当選以来はじめて、大蔵省のメンバーを再編成するという記事である。

主題は、*The Star*を除いて全て、ブレア大統領がマンデルソン氏を大蔵省のメンバーに抜擢し、それにより職を失った人物との関係に絡む記事である。記事2では、高級紙は、*The Times*、*The Independent*、*The Daily Telegraph*を、大衆紙は、*The Mirror*、*The Sun*、*The Star*を使用した。

II-1 ヘッドライン

各紙のヘッドラインは以下のとおりである。

- (25) Blair puts ally into Treasury in major reshuffle (*The Times*)
- (26) Mandelson eyes up Cabinet position (*The Independent*)
- (27) Mandelson to get Cabinet post (*The Daily Telegraph*)
- (28) BLAIR REWARD FOR MANDELSON (*The Mirror*)
- (29) RESHUFFLE: IT'S PRESIDENT MANDELSON (*The Sun*)
- (30) Yes spinister (*The Star*)

記事2についても、第1章の記事1と同様に、高級紙は、記事のレジюме、大衆紙は読者の興味を引き付ける、あるいは謎めいた内容となっている。

まず、高級紙では、(25)は、ブレア首相の内閣再編成において財務部門に彼の味方を入れるとして特定の人物については語らずに記事の全貌を伝え、(26)(27)はマンデルソンが大蔵省の職を獲得したとする記事である。それに対し、大衆紙(28)は、(25)と同じブレア首相を主語にしているが、“reward”という評価的な動詞を用いている。(29)は、“reshuffle”の一語で状況を説明し、マンデルソンに、“president”という語をつけることにより、読者の注意を引き付けている。この“president”は、実際に“president”という職に着いたわけではないが、誇張した表現を用いている。(30)の“*Yes Spinister*”は特に興味をそそる。これは、“*Yes Minister*”という1980年代のイギリスのテレビコメディ番組で、あまり有能でない大臣と官僚を主人公に、英国政治の駆け引きを描いた番組が下敷きになっていると思われる。それに“spinister”という語遊びを加えている。“spinister”は、*OED*にも掲載されていない語彙であるが、それをインターネットで検索してみると、ロボットの絵が写し出され、“Spinister is as mysterious to his fellow Decepticons as he is to his enemies. ...Spinister's favorite and most effective battle tactic is to sneak up on unwary Autobots, ...”と表現されており、正体はロボットの一種であるようだ。実は、*The Star*の記事だけが、主題の中心がマンデルソンではなく、同時に昇格予定であるカニンガムという人物になっている。それゆえ、憶測の域は出ないが、カニンガムという腕利きのロボットを導入したということを知りたいのであろうか。これも

非常に謎めいた表現で読者の興味をそそっているのである。

II-2 書出し

各紙の書出しは以下のとおりであった。

- (31) TONY BLAIR will bring Stephen Byers and Peter Mandelson, the leading modernisers, into his Cabinet today in his first reshuffle since his election victory. (*The Times*)
- (32) PETER Mandelson is expected to get a Cabinet job today, as Tony Blair announces his first Cabinet reshuffle. (*The Independent*)
- (33) PETER Mandelson, the minister without portfolio, may be granted his wish today to run a department of state if, as expected, Tony Blair offers him a Cabinet post. (*The Daily Telegraph*)
- (34) PETER MANDELSON will today step out of the shadows with his own top Cabinet job. (*The Mirror*)
- (35) PREMIER Tony Blair and Chancellor Gordon Brown were at war last night over the Cabinet reshuffle. (*The Sun*)
- (36) Jack Cunningham will become Tony Blair's new "Minister of Spin" in today's Government reshuffle. (*The Star*)

書出し部分においても高級紙の(31)(32)(33)は、共にマンデルソンの大蔵省への入閣についての事実を伝えているが、大衆紙(34)は、同じように入閣の事実を伝えてはいるが、マンデルソンについて、“step out of the shadows”と主観的な表現を用い、(35)では、マンデルソンの入閣にまつわるブレア首相とブラウン大蔵大臣が論争した記事を焦点にして、“be at war”で始まっている。本文においても、この二人の「争い」がメインテーマとなって展開されていく。(36)は、“Minister of Spin”として、ヘッドラインの“Spinister”と“Spin”も語遊びを使っており、内閣を切り盛りする大臣ということであろうか。書出しについても、大衆紙の主観的な一面が現れている。

II-3 本文

次に、本文中の特徴であるが、今回の内閣再編成により、そのポストの降格を余儀なくされ、「首になる」という表現については、各紙とも、“sack”を使用していたが、その他の例に注目してみることにする。

- (37) Nick Brown, ..., will get one of the least senior Cabinet posts as a compensation for a move... Mr. Blair is expected to sack between eight and ten ministers ... (*The Times*)
- (38) Only two people are to be sacked. It is widely assumed that one will be Gavin Strang... (*The Telegraph*)
- (39) Two Cabinet Ministers face the chop... (*The Mirror*)
- (40) Cunningham had been tipped for the sack... But facing the axe or demotion are current Cabinet chief David Clark and Social Services Secretary Harriet Harman. (*The Star*)

高級紙の(37)では“compensation for a move”と“is expected to sack”、(38)では、“It is widely assumed that”のように、非常に婉曲的に表現しているのに対し、大衆紙の(39)では“face the chop”、(40)では“face the axe and demotion”と、“face”、“chop”、“axe”など単音節の単語を使用し、またより口語的な表現を用いているのがわかる。

さらに、今回の内閣再編成の表現については、各紙ともに、“reshuffle”という表現を使用しているが、*The Star* は、“reshuffle”と共に、“Who’s in and Who’s out will certainly be known...”という非常に平明でインフォーマルな表現を使用しているのが注目される。

その他の特徴では、*The Sun*は、上述したように記事全体を、ブレア首相とブラウン大蔵大臣の“battle”の場として、“arch enemy Mr Brown”、“Iron Chancellor might force him to cave in.”などの表現を使用した本文の構成も興味をそそる。

次に記事1と同様に、ゲルマン系とロマンス系の語彙数の比較調査を試みた結果が、表3、表4である。

表3 記事2の中の名詞・形容詞・動詞の語源別総数一覧

新聞名	ゲルマン系				ロマンス系			
	名詞	形容詞	動詞	合計	名詞	形容詞	動詞	合計
<i>The Times</i>	20	6	24	50	52	9	35	96
<i>The Independent</i>	13	9	26	48	49	14	30	93
<i>The Daily Telegraph</i>	23	10	27	60	56	25	36	117
<i>The Mirror</i>	15	4	16	35	34	10	23	67
<i>The Sun</i>	7	3	12	22	25	7	14	46
<i>The Daily Star</i>	10	4	10	24	14	0	7	21

単位：単語数

表4 記事2の中の名詞・形容詞・動詞における語源別比率

新聞名	名 詞		形 容 詞		動 詞		総 計	
	ゲルマン	ロマンス	ゲルマン	ロマンス	ゲルマン	ロマンス	ゲルマン	ロマンス
<i>The Times</i>	28%	72%	40%	60%	41%	59%	34%	66%
<i>The Independent</i>	21%	79%	39%	61%	46%	54%	34%	66%
<i>The Daily Telegraph</i>	29%	71%	29%	71%	43%	57%	34%	66%
<i>The Mirror</i>	31%	69%	29%	71%	41%	59%	34%	66%
<i>The Sun</i>	22%	78%	30%	70%	46%	54%	32%	68%
<i>The Daily Star</i>	42%	58%	100%	0%	59%	41%	53%	47%

まず語彙全体を概観すると、ロマンス系の語の割合が多いのは、第1章で示したとおりであるが、その中で比較を試みると、名詞では、*The Star*、*The Mirror*においてゲルマン系の語の割合が高くなっている。形容詞、動詞についても、*The Star*にゲルマン系の語が最も多く、顕著な結果が現れた。また*The Independent*と*The Sun*は、特にロマンス系の単語の割合が多かった。

3つの品詞をまとめた総数で語源の割合を見ても、ゲルマン系の語の比率が最も多かったのが*The Star*であり、ほかの各紙は横並びとなった。大衆紙の中でも特に、「俗っぽい」印象を受ける*The Star*において、最も顕著な結果が現れたことは、予想通りとも言える。

最後に、各紙の人物の描写について比較してみることにする。

(41) PETER Mandelson, the minister without portfolio, may be granted his wish today to run a department of state... (*The Telegraph*)

(42) Minister without Portfolio Mr Mandelson will become one of the youngest Cabinet Ministers. (*The Mirror*)

まず、(41)では、主部に注目すると、マンデルソンの職名について、文頭で主語と同格にして表現されているが、(42)では、固有名詞の前に職名を付けて、形容詞的に使用している。次に同じような別の例を各紙から取り上げてみる。

(43) The shake-up will be marked by the elevation of Jack Cunningham, a veteran of the last Labour Government in the 1970s, to the post of Cabinet “enforcer”... (*The Times*)

(44) Jack Cunningham, the Agriculture Minister, is predicted to become a

Cabinet “enforcer”, despite earlier reports that he might be sacked. (*The Independent*)

(45) The arrival at the top table of the ambitious Mr Mandelson, . . . , would coincide with the unexpected promotion of Jack Cunningham, the Agriculture Minister, to a new post of Whitehall “enforcer”. (*The Telegraph*)

(46) Agriculture Minister Dr JACK CUNNINGHAM is to be promoted to a new “enforcer” post to spot potential blunders and co-ordinate policies. (*The Mirror*)

(47) But in the face of Mr Brown’s opposition, Mr Blair gave Agriculture Minister Jack Cunningham the job. (*The Sun*)

Jack Cunninghamの表現についても、高級紙と大衆紙で大別される。(43)(44)(45)では、人物の紹介について主語と同格を使用しているのに対し、大衆紙は職名を固有名詞の前に出し、形容詞的に使用している。特に文頭にこの表現を多用しているのが、*The Mirror*で、“Former Chancellor Lord Healey”、“Deputy Premier John Prescott”といった形の主部を使用している。豊田(1998b:646-648)は、「大衆紙のレトリック」において、「文頭と同格を構成する場合、たとえば、Noel Edmonds, a TV starよりも、TV star Noel Edmondsの方が人目を引く。…印象価値の低い固有名詞で始めるよりも、[形容詞] + [属性] + [固有名詞] で表現する方が、読者の目を引く‘eye-catching’な手法だからである」とし、大衆紙の特徴としているが、上記の例文では特に大衆紙(42)(46)、そして記事1の例文(15)についても、それがあてはまる。

記事2においても、高級紙と大衆紙の英語には、顕著な違いが見られた。

III. おわりに

以上、2つの記事について高級紙と大衆紙に分けて比較を試みたが、大衆紙は、高級紙に比べ、よりインフォーマルな語彙や文体を使用することを再確認し、また、大衆紙の記事の焦点は、特に人物にあり、その人物の心的状況をより詳細に、主観的、感情的な語彙を織り込みながら記事を展開していることが確認された。

また高級紙の*The Times*は、従来から高級紙の代表と考えられているが、(13)の“visibly shocked Clinton”という人物描写や、ゲルマン系の語彙が比較的多いことなど、他の高級紙と比べて、よりインフォーマルな語彙や文体を使用している場合があることが確認された。これについては、Ian Robinson(1973:99-145)の“The Vulgarization of ‘The Times’”という1970年代の論文の中でも紹介されており、今後も考察を加えていきたいと思っている。

野波 侑里：新聞英語の二極性に関する一考察

[参考文献]

- 1) Straumann, Heinrich(1935), *Newspaper Headlines :A Study in English Method*, London, Unwin Brothers LTD.
- 2) Potter, Simeon(1957), *Our Language*, London, Penguin Books.
- 3) Evans, Harold(1972), *News Headlines*, London.
- 4) Robinson, Ian(1973), *The Survival of English*, Cambridge, Cambridge University Press.
- 5) Mardh, Ingrid(1980), *Headlines: On the Grammar of English Front Page Headlines*, Lund, CWK Gleerup.
- 6) Quirk, Randolph, *et al.*(1985), *A Comprehensive Grammar of The English Language*, London, Longman.
- 7) Crystal, David(1988), *English Language*, London, Penguin books.
- 8) Fowler, Roger(1991), *Language in the News: Discourse and Ideology in the Press*, London, Routledge.
- 9) O' Donnell, W.R. and Loreto ,Todd (1991), *Variety in Contemporary English*, London, Routledge.
- 10) Tunstall, Jeremy(1996), *Newspaper Power: The New National Press in Britain*, Oxford, Clarendon Press.
- 11) Reah Danuta(1998), *The Language of Newspapers*, London, Routledge.
- 12) Bell, Allan *et al.* (1998), *Approaches to Media Discourse*, Oxford, Blackwell.
- 13) 梅田修(1985), 『英語の語源物語』,大修館書店
- 14) 和田義隆(1987), 『新聞英語の研究』,北星堂書店
- 15) 渡辺昇一(1990), 『英語語源の素描』,大修館書店
- 16) 豊田昌倫(1998a), 「報道英語の二極性」, 『英語青年』 Vol.CXLIII, No.11,602-604, 研究社
- 17) 豊田昌倫(1998b), 「大衆紙のレトリック」, 『英語青年』, Vol.CXLIII, No.11, 646-648, 研究社